# 学校のあした

## 県内・進む統廃合

第1部 それぞれの選択 5

# 「連携」児童・教諭に刺激

## 香美町（兵庫県）の挑戦 ㊦

9月29日午前、香美町山間部にある村岡小学校。同小と近くの兎塚小学校の1年生児童合わせて約30人が算数の授業に臨んでいた。両校の担任4人とスクールアシスタントの計5人が、4つの班に分かれ、一人一人に丁寧に教えていた。

「連携授業が始まる前はいろいろ悩んだ」。村岡小の井上美佐子教諭はこう思い出す。

他校の生徒の個性を把握できない中、どう教えたらいいのか。中にはマンツーマンで付いて支援が必要な子もいる。何より、子どもたちが仲良くなれるだろうか。

しかし、心配は無用だった。打ち解けるのは予想以上に早く、だんだん授業の形ができあがった。授業は準備がものをいうが、先生同士の打ち合わせの回数も以前より減っていき、現在は1回程度にとどまるようになった。

「他のベテランの先生の教え方を間近で見るのは、若手にとっても勉強につながる」。同小の中井宏校長は教わる側だけでなく、教える側の力の向上にもつながるとメリットを挙げた。

連携グループ授業が始まる前、町が保護者や地域住民を対象にしたアンケートでは統廃合するべきという声も根強かった。だが現在、町の保護者には肯定的な受け止め方が広がる。

地方公務員吉津弘一さんは「全く知らない子と触れ合うのは良い意味で刺激になる」、漁協職員澤田敏幸さんは「子どもたちが協調性を育むきっかけにつながる」と評価。昨年2月のアンケートでは、実施する学校の8割以上の保護者が「意義ある取り組み」と回答した。

子どもたちも効果を実感。村岡小学校時代に連携グループ授業を経験した村岡中1年の西垣佳華さんは「中学では皆顔見知りばかり。すぐに打ち解けることができた」と振り返った。

軌道に乗り始めた香美町の取り組みを参考にし、全国で同じような形の授業を始めたところも出てきた。

静岡県中部にある川根本町もその一つ。町の小学校4校の児童数は計207人で、この10年で半分に減った。全て統合しても1学年40人に満たない。それでも選んだのは、統廃合ではなく存続だった。町教委教育総務課の宮島明利管理指導主事は「限られた教員を有効活用し、児童の学習意欲を駆り立てる連携授業は、少子化が進むわが町にフィットしている」と強調。このほか広島県安芸太田町、岩手県宮古市などの自治体でも導入が相次いでいる。

「うちの挑戦はまだ道半ば」。香美町の教育関係者は、こう口をそろえる。

もちろん、このままずっと各校を存続させると決まっているわけではない。各校は年に一度、保護者や地域住民を対象にした会議を開くことが決まっている。その場のアンケートなどでもし他校との統合が好ましいという意見が多数を占めたならば、町長や教育委員のメンバーで構成される会議に諮られた上、廃校という決定がなされる運びだ。

浜上勇人町長は小学校存続の大切さを訴える一方、「『統廃合が必要』となれば、当然民意をくんだ判断をしなければならない」と話す。やはり最も大切なのは、そこに住む人たちの「声」だ。

2校合同で算数の授業をする子どもたち。先生の間では「他の先生の指導法をじかに聞くことができ、勉強になる」といった声が聞こえた＝9月29日、香美町村岡小